
僕は彼に惚れたんだ。

すとむみずみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕は彼に惚れたんだ。

【Nコード】

N3356T

【作者名】

すとむみずみ

【あらすじ】

僕は、まぎれもなく、彼に惚れた。

桜薫る春の事だ。

めんどくさい事に、うちの中学では、全員がなにかしらの部活に入る事が義務付けられていた。

小学校六年間は、部活としてのスポーツに縁がなかった。せいぜい、授業でやったマラソンとか、サッカーとか。

それ以前に、僕は致命的なまでの運動音痴だ。別に持病云々でドクターストップがかかっているわけでもなかったけど、なんとなく体を動かすのがめんどくさかった。

そんな訳で、入学早々に行われたスポーツテストでは、クラスの平均をガタリと下げ、まあ、自分のトロさを露呈してしまった。

別にそれはなんてことはない。早い話、慣れているから。ろくに話した事もない男子に笑われるのにも、慣れたを乗り越して飽きた。

そして同時に、文科系の部活に入部する事を決意した。

幸いな事に、どの部活に入るかを決める時間が、仮入部期間と並行して一週間設けられた。

先生からその事を聞いたとき、軽い鬱になったのは理解に難しくないだろう。というのも、僕は何をするにも消極的で、なるべく陰にいたがる。みんなで部活動頑張りましょうなんて、冗談じゃない。

一日目。

部活動紹介というユニークな行事。それぞれの部活代表者四、五名で部活の概要を、必要があれば実演もしながら紹介する、らしい。

六コマの授業のうち、下半分を使って、四、五限目に運動系、六限目に文化系の部活を紹介するらしい。

朝、担任からその事を聞いたとき、僕は、四限目は寝れそうだなとか、とにかく他愛のない事ばかりを考えていた。

ついに四限目がやってきた。

持ち時間は一つの部活につき十分。五十分の授業時間からそれをさしひいた十分は、移動や休憩に充てられるのだろう。

ま、この時間はずっと夢の中で休憩させていただくけど。

うとうとしていると本当に寝てしまっていた。思い込みの力ってすばらしいな。

起きて、というゆり慌ただしくなった話し声に起こされて立ち上がる。

紹介をしていた先輩たちも、すこし焦って片付けをしている。

ふと目を流すと、人の流れに逆らう数人の影。教師の許へと向かっている。

「あのバカ、寝てたんだぜ。マジ、ドンマイ」

ふとそんな声が聞こえた。発信源は、たいして仲良くもないただのクラスメイト。そういえば、向こうにいつてる連中も同じ教室で見た覚えがあるような。

僕は先生に見つからなかった運の良さに感謝しながら、これから運が尽きやしないか心配になった。

まあ、さっそく尽きた訳だけど。

例にならって五限目もまどろんでいたら、担任に目をつけられた。

結局五限目と六限目の間の休憩時間を説教に割かれた。

「おまえはなにがしたいんだ。どの部活に入るつもりなんだ」

貴重な特徴のひとつ、低い声で担任が言う。帰宅部と言えば納得するだろうか。

「別に。入りたいのなんてないです」

「運動がしたくないなら、文化部でもいいんだぞ。書道、茶道、習字、軽音、調理。他にもたくさんある。他の学校はこんなにないぞ」

それじゃ十分ずつ時間がとれないだろ、と思ったが、そういえば朝、文化部は三分ずつとか言っていたな。

三分じゃ、軽音部なんてまともな紹介できないだろ。

「とにかく」

担任が強引に話を終わらせようとする。自分から呼び出しておい
て、勝手な男だ。

「次の時間じっくり考えて、来週までにどこに入部するか決めてお
けよ」

お許しがでたから、いくつかの言いたい事を飲み込んで生徒の群
れへと帰る。

バカらしい。部活に本気で打ち込める奴なんて、ほんの一握りだ。
強制参加させるよりは、目標を設定している奴を自由に参加させれ
ばいいじゃないか。

思わずため息が出た。しかし、それを打ち消すようにチャイムが
鳴る。言うまでもなく、それは六限目の開始を告げた。

茶道部、バツ。自分には似合わない。

習字部、バツ。三歳から書き始めた僕の字の汚さは九年の時間を
費やして培われた。三年間で矯正できるレベルではないのだ。

オカルト研究部、バツ。太ったメガネ先輩たちと同じ部屋にいる
のは、個人的によろしくないな。魔王のコスプレもしたくない。

エトセトラ、エトセトラ。どれも自分には向いていない。

最後、軽音部、バツ、ではなかった。たった三分でこんなに表現
できるのか。こんなにも鋭く、胸を貫くようなサウンドが。

いいだろう、音楽。

僕の青春、おまえに懸けてやるよ。

善は急げ。思い立ったが吉日。

誰かが言っていた。そんな気がする。

そのありがたい教えに従って、僕は部室のドアを叩いた。無論、軽音部の。

中にいた人は四人、つまりさっきの紹介でステージに立っていた人たちだ。

近くで見ると、なんてことない人たち。

まずは、無言を貫く。こっちから話しかけるなんて事はしない。

「あの、君、もしかして」

一番手前の、部活動紹介で自らを部長と紹介した、細身の男子生徒が声をかけてきた。若干戸惑っているようにも見える。

「入部、希望かな」

「仮、ですけど」

僕が答えると、彼は目を輝かせた。いや、彼だけではない。後ろに控えていた人たちも、だ。

その後は、いろいろ訊かれた。

音楽経験や希望楽器はあるか、などを事細かく。

生憎すべてノーだ。

部長は少し残念そうに苦笑した。そして、僕にギターを手渡した。いくら僕でも、それがギターだということくらいはわかる。弾けるか、と問われればこれもまたノーだが。

とりあえず、ストラップに肩を通す。部長がギターの高さを調節してくれた。

そして、彼は僕の前に大きな姿見を運んできた。

僕の不思議そうな表情を察したのだろう、彼が説明を始めた。

「これはまた後で説明するけど、フォームをチェックするための鏡なんだ」

部長、申し訳ないけど、僕が不思議そうな顔をしている原因は。

鏡に映る自分自身だ。

驚く程ギターを似合わせている。まるで僕じゃないようだ。

そして僕は惚れた。

鏡の中でギターを携え、僕と目をあわせている彼に。

(後書き)

BLじゃないよw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3356t/>

僕は彼に惚れたんだ。

2011年7月27日09時06分発行